

ハインリヒ・マン『ウンラート教授』における批判的認識と〈権力〉の問題：ゾラ論』におけるニーチェ像の伏線として

長光, 卓
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/7405138>

出版情報：九州ドイツ文学. 39, pp.17-29, 2025-12-26. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



ハインリヒ・マン『ウンラート教授』における 批判的認識と〈権力〉の問題

—『ゾラ論』におけるニーチェ像の伏線として—

長 光 卓

0. はじめに

本論は、多分にニーチェ小説の性格を持つハインリヒ・マンの長編小説『ウンラート教授』¹⁾ (1905) における主人公ウンラートと副主人公ローマンの性格描写が、中期のエッセイ『ゾラ論』²⁾ (1915) におけるニーチェ像の伏線となっていることを明らかにする試みである。

初期マンにおけるニーチェ受容を論じるにあたっては今もってスタンダードとすべき解釈を示したエルケ・エムリッヒの研究は、『ウンラート教授』をマンによるニーチェ的な〈権力〉思想の超克とフランス啓蒙主義的な〈精神〉への転回を示す作品として扱っている。³⁾ エムリッヒによれば、ギムナジウムの古典文献学教授として登場するこの作品の主人公ウンラートはニーチェに対する風刺であり、ウンラートの〈権力〉によって破滅へと導かれる小さな町を「正気」(U, S. 570) に戻らせる「見えざる精神」(ebd., S. 422f.) である生徒ローマンに、のちにエッセイ『ゾラ論』においてゾラに形象化されるところの、いわゆる〈行為する精神〉の萌芽が見られる。⁴⁾

しかし、世紀転換期にマンがニーチェから決別した⁵⁾ と主張するエムリッヒの研究は、『ゾラ論』に描かれる微妙な陰影を帯びたニーチェ像を決定的に見落としている。このエッセイにおいて、「精神のために戦うことを考えていない」(HMEP 2, S. 186) 知識人たち——〈精神〉を騙りながらも、〈精神〉とは対立する「法を犯す権力者たち」のために彼らの「不法」を「法に捻じ曲げる」(ebd., S. 198) 知識人たち——とは異なり、「崇高かつ純粹な未来の来るべきことを人間のために信じ」てドレフュス事件で戦ったゾラをマンは「精神的人間」(ebd., S. 186) と呼ぶ。その際、ニーチェは「束の間」(ebd.) とはいえ、このゾラと並び立っていた存在として描かれている。

マンは、「人間に対しては不信を抱いていた」ためにのちに〈権力への意志〉や〈超人〉思想へと「向きを変えてしまった」という留保は付けつつも、「人間的な、あまりに人間的なもの」(ebd.) を哲学していたニーチェに対しては一定の評価をしている。『人間的な、あまりに人間的な』(1878) における、フランス・モラリストの思考スタイルに強く影響を受けたニーチェの社会批判、いわゆる〈暴露心理学〉は、宗教や道徳といった現行の社会的規範のいわば「人間的」な舞台裏を明らかにしようとする点において、自然主義作家ゾ

ラの小説作品——例えば『居酒屋』（1876）や『ナナ』（1879）——における仮借ない現実の暴露を通じた社会批判と通ずる。つまり、マンは社会に対するニーチェの批判的認識を評価していたと言える。

このことを踏まえたうえで『ウンラート教授』に目を転ずるならば、次のような問いが浮かび上がる。すなわち、この長編小説が多分にニーチェ小説の性格を持っていることに鑑みるならば、のちに『ゾラ論』で描かれるところの微妙な陰影を持つニーチェ像——批判的認識と〈権力〉の問題——が、ウンラートとローマンの性格描写に先取りされて描かれているのではないか、という問いである。本論はこのことを明らかにするために、以下のような構成を取る。第一章では、ウンラートの〈権力〉を社会に対する彼の批判的認識との関連で分析する。第二章では、ウンラートの〈権力〉に対するローマンの批判的認識の分析が主題となる。

1. 批判的認識と〈権力への意志〉——ウンラートの場合

『ウンラート教授』の主人公ウンラートは、この小説の舞台である小さな町の人々を破滅に導く「あらゆるものの終わりをその精神に秘めた〔中略〕一個の爆弾」（U., S. 406）として描かれる。この「一個の爆弾」とは何であろうか。何が小さな町の人々を破滅へと導く〈権力＝力〉をウンラートに与えるのであろうか。既に多くの研究が指摘してきたように、ウンラートはいわば戯画化されたニーチェである。⁶⁾「ホメロスにおける不変化詞」（ebd., S. 404）について研究するギムナジウムの古典文献学教授としてのウンラートは次のように語られる。

彼は貧しく、世に認められてもいなかった。誰一人として、二十年来彼が進めてきた重要な仕事のことは知らなかった。彼は人望がないばかりか、嘲笑的になりながら民衆のなかを歩いた。しかし彼は、彼自身の意識では、支配者の側に属していたのだ。どんな銀行家も、どんな君主も、ウンラートほど強く権力に関わっていなかった。彼ほど、今あるものの維持に関心を寄せていなかった。〔中略〕影響力ある教会、堅固なサーベル、絶対の服従と、硬直した道徳！それでいて彼には少しの信仰心もなく、自分自身については極めて自由な思考が出来た。だが、暴君である彼は、奴隷を維持する術を心得ていた。自分のもとに押し寄せる賤民たちを、敵を、五万人の反抗的な生徒どもを調教する術を心得ていた。（ebd., S. 403f.）

かつての教え子たちや現在ギムナジウムに通う生徒たち、すなわち町の人々——「彼にとって学校は校庭の壁で終わるものではなかった。周囲の家々を超え、住民のあらゆる年齢層にまで広がっていた」（ebd., S. 380）——からそのみすばらしく、汚らしい身なりゆえに「ウンラート（汚物）」とあだ名される彼は、一介のギムナジウム教授でしかないにも拘わらず、彼の意識のなかでは、「銀行家や君主」よりも〈権力〉に関わっている「支配者」であ

る。というのも、彼によれば、彼は「奴隷たち」の「硬直した道徳」から解放された「極めて自由な思考」ができる、「低劣な俗物の道徳とは全く違った、別の道徳的要請を持つ人々」(ebd., S. 518)の一人であるからだ。実際、彼の生徒たちに対する支配はこの「極めて自由な思考」に基づいている。彼は『オルレ안의処女』における「王子の三つ目の祈り」(ebd., S. 377)についての作文を試験課題として生徒たちに課す。無論、シラーのこの戯曲には「王子の三つ目の祈り」は語られていない。しかし、生徒たちは「四つ目の祈りでも、五つ目の祈りでも」、「存在するなどとは誰も信じていない事柄、例えば義務への忠実だとか、学校の恩恵だとか、あるいは兵役への愛とかいった題目について」でも、「ウンラートが望むならば」「決められた数ページを、月並みな文句で」(ebd., S. 378)埋めなければならない。というのも、生徒たちは「教師の厳格な規律」(ebd., S. 404)に服さなければならないから。すなわち、ウンラートは「教師の厳格な規律」に服さなければならないという「硬直した道徳」を利用し、生徒たちに内的に抑圧⁷⁾することで支配するのである。この内面的抑圧による支配が可能であるがゆえに、ウンラートは彼の意識のなかで「銀行家や君主」よりも〈権力〉に関わっている「支配者」なのである。

彼の支配を可能なものとしているのは、「奴隷たち」の「硬直した道徳」から解放された彼の「極めて自由な思考」であるが、これについて、ウンラートは次のように説明する。

生徒の前で、古典的理想を意味のない童話のようにしか語ることが出来ないとしたら、私は我が人生を——いやはやまた——まったくの徒労と見做さざるを得ません。人文的教養を積んだ者は、下層階級の倫理的迷信など、当然無視して構わんです。(ebd., S. 496)

「下層階級の倫理的迷信」という「硬直した道徳」を「無視」することが出来る自らの「極めて自由な思考」を、彼は「人文的教養」、就中「ホメロスにおける不変化詞」という古代ギリシアの文献学的研究による「古典的理想」の認識から、すなわち「低劣な俗物の道徳とは全く違った、別の道徳的要請」が存在するという認識から得ている。古典文献学の研究による宗教や道徳といった現行の社会的規範に対する批判的認識と、それに基づく「極めて自由な思考」の獲得——ここにニーチェが意識されているのは明白であろう。つまり、ニーチェ的に言い換えるならば、「低劣な俗物の道徳」はキリスト教的な〈奴隷道徳〉を意味し、それとは「全く違った、別の道徳的要請」は〈支配者道徳〉を意味する。ウンラートは道徳的価値に対するこの認識によって、〈奴隷道徳〉を生徒たちへの内面的支配に用いることが出来る。それゆえ、彼は「貧しく、世に認められても」いないという外的事実にも拘わらず、〈支配者道徳〉に従って、自らを「高等な人間」(ebd., S. 387)と感じ、町の人々を「賤民たち」として蔑むことが出来るのである。

しかし、ウンラートはニーチェが称揚したような〈支配者〉=〈強者〉ではない。彼に支配者意識をもたらす「極めて自由な思考」は、「人文的教養」による現行の社会的規範に対する彼の批判的認識に基づいているわけだが、この「人文的教養」、すなわち古典文献学者

としての彼のライフワークである「ホメロスにおける不変化詞」の研究については次のように語られる。

彼が取り組んでいる文学的研究のことを人は何も知らないが、このライフワークは、ずっと以前から彼のひっそりとした部屋で進められ、いつの日かウンラートの墓穴から咲き出でて、世間を驚かすことになるかもしれないのだ。(ebd., S. 404)

彼の「人文的教養」は、死後の名声という一種の彼岸的な生の充実を、ニーチェ的な意味での〈禁欲主義的理想〉を志向している。ニーチェによれば、「生に抗する生」であるところの〈禁欲主義的理想〉は「退廃しつつある生の防御本能と救治本能とから生ずるもの」である。⁸⁾ すなわち、ニーチェに従うならば、ウンラートは「退廃しつつある生」の〈弱者〉である。つまり、ウンラートの批判的認識とそれに基づく「極めて自由な思考」は彼の疎外された生の代償であり、彼の支配者意識は〈弱者〉である彼のルサンチマンの表れである。

ところで、ニーチェにおいてルサンチマンは、〈弱者〉が自らの〈権力への意志〉を発揮できないために〈強者〉に抱く情念を意味する。⁹⁾ 現行の社会的規範に対するウンラートの批判的認識——ニーチェ的に言えば、「習慣化したもの、規則化したもの、持続的なもの、既成の決まったものを憎む」¹⁰⁾ 〈自由精神〉——は、ルサンチマンという〈弱者〉としての彼の〈権力への意志〉と結びつき、「暴君」を生み出す。しかし、この「暴君」は「下層階級の倫理的迷信」という虚構に対する批判的認識によって創出された新たな価値に立脚する〈超人〉的存在ではない。というのも、彼の〈権力〉は「迷信」=虚構を利用することに立脚している¹¹⁾ ため、彼は「今あるもの」を「維持」しようとするからだ。すなわち、生からの疎外に由来する彼の批判的認識は、まさにその生からの疎外ゆえに、容易にルサンチマンという〈弱者〉の〈権力への意志〉と結びつき、「迷信」の批判的解体による新たな価値の創出ではなく、解体されるべき「迷信」の「維持」による「暴君」の〈権力〉を生み出すのである。

小説後半部では、この「暴君」が「アナーキスト」(ebd., S. 547)に変貌するが、この場合も、ルサンチマンと結びついた批判的認識が「迷信」=虚偽によって〈権力〉を生み出すという基本的な構造は同じである。女芸人ローザ・フレリヒとの市民的規範から逸脱した関係によって、ギムナジウムの教授職を解雇されたウンラートは、町の人々を自分のように「信仰と倫理から逸脱」(ebd., S. 513)させることによって彼らを破滅させることを思いつく。すなわち、「自分の例が他の人間にとって危険を意味し、町に破滅の種を蒔きうる」(ebd.)のだと。彼がこのような「極めて自由な思考」に至ったのも、「俗物の道徳」を「下層階級の倫理的迷信」として理解しているからに他ならない。実際、この新たな展望に至った直後、ウンラートはフレリヒに語る。

私は——まこと——よく知っているのだ。道徳と呼ばれるものは大抵、愚かさでごく

密接に結びついている。この点を疑うことが出来るのは、人文的教養を持たぬ輩ぐらいのものだ。とはいえ道德は、これを意に介さぬ人間にとって有益だ。これなくしては生きられぬ子どもを容易に支配できるからだ。それどころか、臣民根性の持ち主どもには、いわゆる道德を厳しく躰けなければならぬ。〔中略〕だが、——いいかね！——こうした道德を求めながら、私は一度として忘れたことはない。低劣な俗物の道德とは全く違った、別の道德的要請を持つ人々が存在し得る、ということを……。 (ebd., S. 518)

確かに、町の人々を「俗物の道德」から逸脱させる「アナーキスト」としてのウンラートは、彼らをこの道德に縛り付ける「暴君」とは異なる。しかし、道德からの逸脱は、道德がこの小さな町における社会的規範として効力を持っている限りにおいて、町の人々を破壊に導く手段になる。¹²⁾ だからこそ、「アナーキスト」としてのウンラートは「道德を厳しく躰けなければならぬ」と考えるのである。ここでもまた、彼にとって「俗物の道德」という「迷信」=虚構は彼の〈権力〉の道具でしかない。「アナーキスト」としてのウンラートには、「暴君」のときとは別の形で「今あるものの維持」が、「いわゆる道德を厳しく躰け」ることが必要なのである。

「アナーキスト」としてのウンラートは、町の人々をフレイリヒの美によって「ウンラート邸」(ebd., S. 542)で行われる「オルギア」(ebd., S. 532)に引き込み、「硬直した道德」から逸脱させるわけだが、美という手段を通じて町の人々を支配する「アナーキスト」の〈権力〉は、「暴君」の生徒たちに対するそれと本質的に同じものである。まだ彼が教師であった頃、彼は自分の生徒に対する支配について、次のように考える。

ウンラートは〔中略〕彼ら(=生徒たち：長光註)に存在しない事柄について作文を書かせることが出来た。自分に仕えるよう彼らを強いることも出来たし、彼らの志操を訓練して、不遜にも誰かが何かを考えようとしたら、そいつに「考えてはならぬ！」と怒鳴りつけることが出来た。しかし彼は、自分の評価や規範から見て美しいものを、美しいと思うよう彼らに強いることは出来なかった。ひょっとするとこの点にこそ、彼らの反抗心の最後の逃げ道があるのかもしれない。ウンラートの暴君としての衝動はここで、人間の服従能力のぎりぎりの壁に突き当たった……。 (ebd., S. 452)

生徒たちの美的感覚は、彼らに対する「暴君」の支配が内的な抑圧によるものであるために、この支配から逃れる内なる砦、すなわち「彼らの反抗心の最後の逃げ道」として機能している。逆に言えば、「五万人の反抗的な生徒ども」(ebd., S. 404)の美的感覚を手中に収めたときに初めて、ウンラートは「人間の服従能力のぎりぎりの壁」を突き破って、彼らを完全に支配することができるのである。「アナーキスト」としてのウンラートは、もともと地方の酒場を巡業する単なる女芸人でしかないフレイリヒを「小さなアフロディーテ」(ebd., S. 564)として神格化し、彼女自身にも自分が「美の代表」(ebd., S. 560)であるこ

とを意識させることで、町の人々に彼女の美という「迷信」＝虚構を崇拜させる。¹³⁾ 町の人々はウンラートが演出する虚構の美によって、「暴君」に対する場合と同様に、否、それ以上に「アナーキスト」に対して内的に支配¹⁴⁾されるのである。

虚構——社会的規範として既に存在する「下層階級の倫理的迷信」と自らが演出するフレリヒの美——の利用によって、小さな町の人々を支配するウンラートの〈権力〉は支えられている。この虚構の利用という「極めて自由な思考」は彼の批判的認識に基づく。すなわち、生からの疎外に由来するウンラートの批判的認識は、まさしくその生からの疎外ゆえにルサンチマンに駆られ、解体すべき虚構を〈権力〉のために利用し、〈権力〉のためにまた自ら虚構を作り出すのである。したがって、ウンラートがその「精神」に秘めている「一個の爆弾」とは、ルサンチマンという〈弱者〉の〈権力への意志〉と結びついた彼の批判的認識であり、これが小さな町を破滅に導く〈権力＝力〉を彼に与えるのである。

2. 〈行為〉なき批判的認識——ローマンの場合

『ウンラート教授』において、小さな町を「正気」(ebd., S. 570)に戻し、ウンラートの〈権力〉から解放する生徒ローマンは、この「暴君」にとって「見えざる精神」(ebd., S. 422f.)という自らの〈権力〉を脅かす存在として現れる。本論第一章で既に指摘したように、ウンラートの〈権力〉の本質は、〈権力への意志〉に結びついた彼の批判的認識とそれによる虚偽の利用にあった。それゆえ、ウンラートの〈権力〉からの解放は、その権力構造の認識と解体によって為されるはずだ。では、ウンラートに対するローマンの認識はどのようなものであろうか。ウンラートとローマンの互いに対する認識は次のように描かれる。

ウンラートは、ローマンが反抗的で近づき難い雰囲気を持っているうえ、自分を例のあだ名で呼ぼうともしないため、ほかの誰よりもこの生徒を憎んでいるといっただけだった。というのもウンラートは、ローマンが例のあだ名を口にしないことが、逆の場合よりも更に由々しい意味を持つことを薄々感じていたからだ。ローマンはこの哀れな老人の憎しみに対して、いくら頑張っても気の抜けた軽蔑以外何も示すことが出来なかった。嘔吐感の混じった少しばかりの同情もそれに加わった。(ebd., S. 381f. : マンによる強調)

ウンラートは、自らを「例のあだ名」で呼んだ生徒たちを「とっ捕まえ」ようとする。生徒たちはウンラートから「とっ捕まえ」られないように、様々な言い訳を駆使するわけだが、これは逆説的に彼らがウンラートを、本来は敬うべき教師として認識していることを示唆している。また、彼のフロイト的な言い間違い——「私はつまり、この地のギムナジウム第六学年担任の正教授ウン……いや、ラート教授という者だ」(ebd., S. 389)——が示唆しているように、ウンラート自身も自らのあだ名を「教師」としてのアイデンティティー

と同一視している。¹⁵⁾しかし、ローマンはウンラートを「例のあだ名で呼ぼうともしない」。すなわち、ローマンにとってウンラートは、生徒がその「厳格な規律」に従うべき「教師」ではなく、「いくら頑張っても気の抜けた軽蔑以外何も」示すことが出来ない「哀れな老人」でしかないのである。生徒は「教師の厳格な規律」に従うべきであるという「下層階級の迷信」によって、ウンラートの〈権力〉は支えられている。したがって、「暴君」という「権力者を疑う」(ebd., S. 388)ことは、その〈権力〉が依拠しているところの「迷信」=虚偽を認識すること、その内的な支配から解放されることに他ならない。だからこそ、ウンラートにとって「自分を例のあだ名で呼ぼうともしない」ローマンは、自らの〈権力〉を脅かしながらも「とっ捕まえること」が出来ない「見えざる精神」なのである。

では、なぜローマンはウンラートを「暴君」としてではなく、「哀れな老人」として認識することができたのだろうか。ここで重要になってくるのが、ローマンがウンラートに対して抱く「嘔吐感の混じった少しばかりの同情」である。確かに、ウンラートとローマンはその小説における役割は大きく異なる。しかし、彼もまたウンラートと同様に生から疎外された人間である。「ハインエ風の詩」を書き、「文学的教養を積むことに専念していた」ローマンは「三十歳の女性」(ebd., S. 381)、領事夫人ドーラ・プレートポートに恋をし、彼女と女芸人フレイリヒを重ねた詩を書いているが、胸に秘めた彼女への愛が「明るみに」出たならば、猟銃で「命を絶とう」(ebd., S. 436)と考えている。すなわち、彼は「慰め多き世界蔑視」(ebd.)を胸に秘めた典型的なデカダンであり、退廃した生の〈弱者〉である。しかし、彼はまさしくデカダンという〈権力への意志〉の衰退した存在であるために、ウンラートのように〈権力〉を求める〈行為〉が出来ず、現実に対する「イローニッシュな観察者」(ebd., S. 430)にならざるを得ない。それゆえ、彼は詩のなかで「自分の苦しみに対する復讐として、ドーラを穢したい」と思い、彼女を想いながら、もう一方の女の愛撫に隠微な悪徳の味を与えようと」(ebd., S. 560)することで、自らのルサンチマンを想像のなかで発散させるのである。その在り方こそ異なれど、ウンラートとローマンはともに、ルサンチマンを抱える生から疎外された〈弱者〉である。だからこそ、ローマンは「この哀れな老人」に対する「嘔吐感の混じった少しばかりの同情」を感じるのである。

しかし彼は同時に、「イローニッシュな観察者」としてウンラートに対して「軽蔑」も抱く。このローマンの姿にニーチェの姿が透けて見える。というのも、ニーチェは「ルサンチマンからの自由、ルサンチマンに関する啓蒙」を自分が達成したのは、それを自らの病において自らの弱さと力の問題として体験したためである¹⁶⁾と語っているからである。すなわちニーチェによれば、彼はルサンチマンを自ら体験していたために、キリスト教がルサンチマンに駆られた〈弱者〉による支配の道具であり、その道徳が捏造されたもの——すなわち虚構——であることを認識しえたのである。これと同様に、ローマンも自らが抱えるルサンチマンゆえに、「暴君」の本質がルサンチマンに駆られた「哀れな老人」であることを、彼の支配が「迷信」=虚構に依拠していることを見抜く。したがって、ウンラートの〈権力〉構造に対する「イローニッシュな観察者」としての彼の批判的認識は、退廃した生の代償である。

ウンラートが「暴君」から「アナーキスト」に変貌した際も、この「アナーキスト」の〈権力〉に対するローマンの批判的認識は同じ構造を持っている。ウンラートが免職されたのと時を同じくして、ローマンは生まれ故郷の小さな町を離れてイギリスへと出発する。彼が二年ぶりにこの町に帰ってきたときには、ウンラートは「暴君」から「アナーキスト」へと変貌しており、フレーリヒの美によって小さな町の人々を支配していた。ローマンはこの「アナーキスト」の支配の構造を素早く見抜く。

彼は、二年前にウンラートが既に萌芽の形で持っていたものを、すべて開花させたのを確認した。十二分に、と言っていいほどだった。しかし、もっと凄と思ったのは、フレーリヒの変わりようだった。それは、「青き天使」の大衆歌手から高級売春婦への進化だった。〔中略〕彼女と町の人々とのあいだでは、明らかに、騙し合いが行われていた。彼女は美の代表として振舞い、次第にそうしたものとして噂されるようになった。人々のそういう噂を、彼女の方も信じるようになった。恐らく、ドーラ・プレートポートの身にも、かつて同じことが起こり、彼女の方でもお洒落な優雅さを求めるようになったのだろう。ローマンは、いま自分がフレーリヒの状況を分析しているのを、チクチクするほど皮肉なことだと思った。(ebd., S. 559f.)

町の人々を「自己破壊の熱狂」(ebd., S. 548)のうちに破滅させるウンラートの支配構造を、ローマンは自ら命を絶つことも厭わなかった彼のドーラ・プレートポートへの愛のなかに見る。ここでもローマンは、現象の内奥に入り込みながらも「イローニッシュ」に距離をとることによって、この現象を「分析」し、「アナーキスト」の〈権力〉が「暴君」の場合と同じく「騙し合い」＝虚構に依拠していることを批判的に認識する。ドーラ・プレートポートへのデカダンの愛、虚構の美によるウンラートの支配という現象に対する「イローニッシュ」な態度——「アナーキスト」の支配構造に対するローマンの認識はかつての認識と同じく、彼の生からの疎外に由来する。「ウンラートによって生み出され、町全体に広がった風紀壊乱」(ebd., S. 549)がある種のデカダンを意味する¹⁷⁾のであれば、ローマンがデカダンの原因——虚構の美によるウンラートの町の人々に対する支配——を「分析」し得たのは、彼がデカダンだったからということになる。ここでも、ローマンの姿にデカダンでありながら同時にデカダンの反対者であったニーチェ¹⁸⁾の姿が重なる。ニーチェはキリスト教というデカダンの現象の内奥に、道徳の捏造という虚構によるルサンチマンに駆られた〈弱者〉の支配を認識する。これと同様に、ローマンは「町全体に広がった風紀壊乱」というデカダンの現象のなかに、虚構の美によるルサンチマンに駆られた〈弱者〉であるウンラートの支配を認識する。すなわち、「暴君」の場合と同じく、「アナーキスト」の〈権力〉に対する彼の「イローニッシュな観察者」としての批判的認識は、彼の退廃した生の代償なのである。

確かに、ローマンの批判的認識はウンラートの〈権力〉に対するある種のアンチテーゼとして機能している。しかし、彼の批判的認識もまた——ウンラートのその場合と同様

に——ハインリヒ・マンによって批判に晒されている。というのも、ローマンは虚構を利用した「暴君」あるいは「アナーキスト」の〈権力〉を認識するも、その退廃した生ゆえに「イローニッシュな観察者」に留まらざるを得ないからである。実際、ウンラートの「暴君」から「アナーキスト」への変貌をフレーリヒに語る時も、彼は「あの馬鹿みたいなウンラートの話をしているわけでは」なく、ただ「抽象的可能性を極端なところまで先鋭化させただけだった」(ebd., S. 561)。すなわち、彼はウンラートの観察から「興味深い理論」を組み立てるだけで、「現実の物事をじかに見ることはなかった」(ebd., S. 569)のである。

本来アナーキストとは、道徳的に特異な存在であり、理解しやすい極端な存在だった。〔中略〕ところが、ウンラートはローマンの目の前で妻の首を絞めようとし、ローマンに対しては盗みを働いたのである。〔中略〕ローマンの精神はこれまで、これほど信じがたい体験によって試されたことはなかった。今やこの精神は、すべての特性を捨て、「犯罪」に対してはごく市民的に、「警察」という反応を示した。なるほど彼は、それが特に珍しい思いつきではないことは知っていた。しかし、それでことは済むのだと思ひ、疑念をきっぱり振り払った。(ebd., S. 569f.)

確かに、彼は結果的には小さな町を破滅から救う。しかし、彼が町を救う〈行為〉へと出るのは「現実が彼を襲い」(ebd., S. 569)、彼の「精神」が「すべての特性を捨て」たときである。逆に言えば、「見えざる精神」である彼は、「現実」が彼を襲わない限り、「抽象的」な「理論」を弄ぶ「傍観者」や「解説者」(ebd.)に留まり続け、生まれ故郷がウンラートによって破滅へと導かれていることを認識していても、それに対して何ら具体的な〈行為〉をすることが出来ない。したがって、自らの退廃した生に由来するローマンの批判的認識は、ウンラートの〈権力〉を解体する潜在的な対抗力(Gegenmacht)を持っているが、その退廃した生ゆえにこの〈権力〉に対して〈行為〉することができない批判的認識として描かれている。

3. おわりに

ウンラートとローマンは互いに相反する役割を担いながらも、ともに生からの疎外によって社会に対する批判的な認識を獲得し、ともに生からの疎外ゆえに——ウンラートは〈権力への意志〉に結びついた批判的認識として、ローマンは〈行為〉へと結びつかない批判的認識として——作家によって批判的に描かれている。彼らの批判的認識がニーチェ的な特徴を持っていることに鑑みるならば、彼ら二人に対するマンの批判は、ニーチェという〈自由精神〉の持つヤヌスの二つの顔と言えらう。

ところで、『ウンラート教授』を発表したハインリヒ・マンは、当時の恋人イーネス・シュミットに宛てた手紙のなかで次のように述べている。すなわち、「このウンラートとい

う奴は、（驚かないでくれ！）私に少し似たところがある」¹⁹⁾と。その一方で、従来の研究が指摘するように、ローマンにも作家自身が投影されている。²⁰⁾すなわち、ウンラートとローマンの性格描写、彼らの批判的認識はニーチェのそれであると同時に、この哲学者から多大な影響を受けたマン自身のそれであり、『ウンラート教授』における彼らへの批判はつまるところ自己批判である。

このことを踏まえたうえで『ゾラ論』におけるあの微妙な陰影を帯びたニーチェ像を考えてみると、その内実が明らかになってくる。「人間的な、あまりに人間的なもの」を哲学していた〈自由精神〉としてのニーチェの批判的認識は、ウンラートのように〈権力への意志〉へと「向きを変えて」しまい、破壊を引き起こす「一個の爆弾」になる危険を孕んでいると同時に、ローマンのように〈権力〉に対する対抗力となる潜在的な可能性を持っている。しかし、ニーチェ的な批判的認識は、「見えざる精神」としてのローマンのように、その本質——生からの疎外——からして〈行為〉できず、潜在的な対抗力に留まり続けざるを得ない。だからこそ、マンは『ゾラ論』において「精神の人は行為せよ」(HMEP 2, S. 188f.)と呼びかけ、「生を信じ、生を愛する」(ebd., S. 205)ゾラを〈行為する精神〉として描くのである。

『ウンラート教授』におけるウンラートとローマンの性格描写は、ニーチェから影響を受けた自身の批判的認識に対するマンの自己批判である。この自己批判としてウンラートとローマンのなかに形象化された批判的認識と〈権力〉の問題は、のちに『ゾラ論』に描かれるニーチェ像の伏線であると同時に、マンが〈行為する精神〉を標榜する民主主義的作家に至るための重要な契機であった。

注

- 1) Heinrich Mann: *Professor Unrat oder Das Ende eines Tyrannen*. Hamburg 1966. 以下、この作品からの引用はU.の略号とともに頁数を示す。
- 2) Heinrich Mann: *Zola. Im: Essays und Publizistik*. Bd. 2. Bielefeld 2012, S. 148-209. hier S. 186. 以下、この作品からの引用は略号HMEP 2の略号とともに頁数を示す。
- 3) Elke Emrich: *Macht und Geist im Werk Heinrich Manns. Eine Überwindung Nietzsches aus dem Geist Voltaires*. Berlin und New York 1981.
- 4) Vgl. ebd., S. 163-201.
- 5) Vgl. ebd., S. 14f.
- 6) Vgl. z. B.: Rudolf Walter: *Friedrich Nietzsche – Jugendstil – Heinrich Mann. Zur geistigen Situation der Jahrhundertwende*. München 1976. / Peter Fock: *Der Roman Professor Unrat und Heinrich Manns Kritik des Ästhetizismus*. In: *Literatur für Leser. Zeitschrift für Interpretationspraxis und geschichtliche Textkenntnis*. Heft. 3. München 1982, S. 164-176.
- 7) Vgl. Emrich, S. 176.
- 8) Friedrich Nietzsche: *Zur Genealogie der Moral*. In: *Kritische Studienausgabe*. Bd. 5.

München und Berlin 1999, S. 365f.

- 9) 大石紀一郎ほか『ニーチェ事典』、弘文堂、1995年、666頁参照。
- 10) Friedrich Nietzsche: *Menschliches, Allzumenschliches*. In: *Kritische Studienausgabe*. Bd. 2. München und Berlin 1999, S. 280.
- 11) Vgl. Emrich, S. 176.
- 12) Emrich は後述するフレリヒの美に対する迷信的な崇拝による「アナーキスト」としてのウンラートの権力について考察している（次註を参照）ものの、この「アナーキスト」の権力が「暴君」の場合と同様に、根本的には「俗物の道徳」を必要としていることに関して言及していない。
- 13) Vgl. Emrich, S. 181-187.
- 14) Vgl. ebd., S. 183.
- 15) Vgl. Emrich, S. 164.
- 16) Friedrich Nietzsche: *Ecce Homo*. In: *Kritische Studienausgabe*. Bd. 6. München und Berlin 1999, S. 272.
- 17) Vgl. Emrich, S. 188.
- 18) Vgl. *Ecce Homo*, S. 266.
- 19) Heinrich Mann: *Briefe einer Liebe. Heinrich Mann und Inés Schmied 1905 bis 1909. Teil 1: 1905 bis 1906*. In: *Heinrich Mann-Jahrbuch*. Bd. 17. Lübeck 1999, S. 176.
- 20) Vgl. Walter H. Sokel: *Demaskierung und Untergang wilhelminischer Repräsentanz. Zum Parallelismus der Inhaltsstruktur von „Professor Unrat“ und „Tod in Venedig“*. In: *Herkommen und Erneuerung. Essays für Oskar Seidlin*. Hrsg. von Gerhard Gillespie und Edgar Lohner. Tübingen 1976, S. 387-412, hier S. 396.

Die Problematik der kritischen Erkenntnis und der Macht in Heinrich Manns Roman *Professor Unrat*

— Eine Vorwegnahme des Nietzsche-Bildes im Essay *Zola* —

Masaru NAGAMITSU

Die vorliegende Studie versucht, die Darstellungen von Unrat und Lohmann in Heinrich Manns Roman *Professor Unrat* (1905), der durch den starken Charakter eines Nietzsche-Romans geprägt ist, als Vorwegnahme des Nietzsche-Bildes in seinem Essay *Zola* (1915) zu deuten.

Die bisherigen Forschungen, die den Roman *Professor Unrat* als Wendepunkt Heinrich Manns von der nietzscheschen ‚Macht‘ zum ‚Geist‘ im Sinn der französischen Aufklärung interpretiert haben, haben jedoch das Nietzsche-Bild im Essay *Zola* übersehen. In diesem Essay schätzt Heinrich Mann die kritische Erkenntnis Nietzsches, der „über das Menschliche, Allzumenschliche“ philosophierte, hoch, obwohl er dessen spätere Wendung zum ‚Willen zur Macht‘ und zum Gedanken des ‚Übermenschen‘ kritisiert.

Wenn man die Tatsache, dass der Roman den Charakter eines Nietzsche-Romans besitzt, in dieser Hinsicht bedenkt, stellt sich die Frage, ob nicht bereits in den Darstellungen von Unrat und Lohmann jenes Nietzsche-Bild – nämlich die Problematik zwischen der kritischen Erkenntnis und der ‚Macht‘ – vorweggenommen und gestaltet worden ist. In der vorliegenden Studie wird daher im ersten Abschnitt der Zusammenhang zwischen Unrats ‚Macht‘ und seiner sozialkritischen Erkenntnis sowie im zweiten Abschnitt die kritische Erkenntnis Lohmanns gegenüber der ‚Macht‘ Unrats analysiert.

Im ersten Abschnitt wird aufgezeigt, dass „eine Bombe“ im „Geist“ Unrats die sozialkritische Erkenntnis nietzschescher Art ist, die sich mit dem ‚Willen zur Macht‘ verbindet. Bei Unrat verbindet sich die aus der Armut seines Lebens herrührende sozialkritische Erkenntnis – sein „weiteste[r] Freisinn[]“ in nietzschescher Art – gerade aufgrund dieser Armut leicht mit dem ‚Ressentiment‘ bzw. dem ‚Willen zur Macht‘ des ‚Schwachen‘. Diese Erkenntnis führt nicht zur Schaffung neuer Werte, die durch die kritische Zerlegung der alten Werte hervorgebracht werden sollten, sondern etabliert durch die „Erhaltung des Bestehenden“ bzw. „d[es] sittliche[n] Aberglauben[s]“ die „Macht“ des ‚Tyranen‘ oder ‚Anarchisten‘, die „wie eine Bombe“ die kleine Stadt dem ‚Verfall‘ entgegenführt.

Anschließend wird im zweiten Abschnitt dargelegt, dass „der unsichtbare Geist“ Lohmann ebenfalls die sozialkritische Erkenntnis nietzschescher Art besitzt, die ihn aufgrund seiner Entfremdung vom Leben jedoch lediglich zu einem „ironische[n] Zuschauer“ macht und zur ‚Tat‘ unfähig werden lässt. Er erscheint als typischer *décadent*, also ebenso als vom Leben entfernte und vom ‚Ressentiment‘ getriebene Figur wie Unrat. Deshalb vermag er als „ironischer Zuschauer“ mit

„Mitleid“ und „matter Geringschätzung“ sowohl Unrats Natur als auch die Struktur seiner „Macht“ zu erkennen. Seine Erkenntnis entspricht derjenigen Nietzsches, der als ein *décadent* die Dekadenz kritisiert. Zwar fungiert Lohmanns Erkenntnis als Antithese zu Unrats „Macht“, doch wird auch sie vom Schriftsteller kritisiert. Denn obwohl er durchschaut, dass die seine Heimat zum ‚Verfall‘ führende „Macht“ Unrats aus den Fiktionen besteht, erweist er sich dennoch als unfähig zu handeln, – bis „[d]ie Anschauung der Dinge, die Lohmann gefehlt hatte, nun [...] zu jäh“ kommt und „Lohmanns Geist [...] alle Eigenart“ abwirft. Bei ihm bleibt die aus der Armut seines Lebens herrührende sozialkritische Erkenntnis – die Erkenntnis des „ironische[n] Zuschauer[s]“ bzw. des *décadent* – gerade aufgrund dieser Armut zu keiner ‚Tat‘ fähig.

Heinrich Mann kritisiert die kritischen Erkenntnisse Unrats wie auch diejenigen Lohmanns wegen ihrer Entfremdung vom Leben: zum einen die mit dem ‚Willen zur Macht‘ verbundene Erkenntnis (Unrat), zum anderen die zur ‚Tat‘ unfähige Erkenntnis (Lohmann). Berücksichtigt man, dass beide Erkenntnisse nietzschesche Züge tragen, so lässt sich Heinrich Manns Kritik als Kritik an Nietzsches ‚freien Geist‘, der die janusköpfige Doppelseitigkeit besitzt, deuten. Nimmt man zudem die Ähnlichkeit der beiden Figuren mit Heinrich Mann selbst in Betracht, wird deutlich, dass diese Kritik zugleich als Selbstkritik des Schriftstellers verstanden werden kann, der in seiner schriftstellerischen Selbstbildung stark von Nietzsche beeinflusst wurde.

In dieser Hinsicht tritt der innere Gehalt jenes Nietzsche-Bildes in *Zola* klar hervor. Die kritische Erkenntnis Nietzsches, der „über das Menschliche, Allzumenschliche“ philosophiert, besitzt – einerseits wie bei Unrat – die Gefährlichkeit, sich mit dem „Willen zur Macht“ zu verbinden und zur ‚Bombe‘ zu werden, und – andererseits wie Lohmann – das Potenzial, zur Gegenmacht gegen die ‚Macht‘ zu werden. Jedoch muss diese Erkenntnis ihrem Wesen nach – nämlich insofern sie vom Leben entfremdet ist – notwendig zur ‚Tat‘ unfähig sein und die potenzielle Möglichkeit bleiben. Daher stellt Heinrich Mann im Essay den Schriftsteller Zola, der „dem Leben glaubte und es liebte“, als ‚handelnden Geist‘ dar und ruft auf: „der Geistige handle!“.

Die Darstellungen von Unrat und Lohmann in Heinrich Manns Roman *Professor Unrat* lassen sich als Selbstkritik des Schriftstellers an seiner eigenen, von Nietzsche geprägten kritischen Erkenntnis verstehen. Die in diesen Darstellungen gestaltete Problematik der kritischen Erkenntnis und der Macht ist zugleich die Vorwegnahme des Nietzsche-Bildes im Essay *Zola* und ein wichtiges Moment für die schriftstellerische Entwicklung Heinrich Manns hin zum ‚handelnden Geist‘.